

## 渥美半島における災害拠点病院の必要性について

愛知県厚生農業協同組合連合会 渥美病院

## 1. 渥美半島における災害拠点病院の必要性

令和6年1月に発生した能登半島地震では、半島内の多くの地域で土砂災害、液状化現象、家屋の倒壊、交通網の寸断等が発生し、半島北部の珠洲市や輪島市に甚大な被害をもたらした。

その中で、珠洲市総合病院（115床）や市立輪島病院（175床）が、能登半島北部の拠点としてDMATの受け入れや災害医療コーディネートができたのは、地域災害拠点病院の指定を受け、その役割を發揮できる体制を構築してきたからであると考えられる。

今後、予測されている南海トラフ地震による津波や液状化被害を考慮すると、主要道路が通行不能となり渥美半島自体が孤立する可能性がある。人口あたりで見ると東三河南部医療圏にはこれ以上災害拠点病院は不要であるが、地理的には渥美半島にも災害拠点病院が必要である。（知多半島には災害拠点病院が3病院あるが渥美半島にはない。）

災害発生時には、田原市内に複数の医療救護所が設置される計画であるが、田原市内には、渥美病院以外には入院設備を有する医療機関がないため、各医療救護所と渥美病院が連携をして、地域の災害医療を担うこととなる。

田原市内唯一の病院である渥美病院が災害時の医療拠点としての役割を發揮できるよう、DMATの保有をはじめとした医療提供体制の構築について、ご理解とご協力をお願いしたい。

## 【東三河南部医療圏の状況】



図1 当院と東三河南部医療圏の災害拠点病院

- 渥美病院から各災害拠点病院までの距離（図1）
- ・豊橋市民病院 18 km
  - ・豊橋医療センター 21 km
  - ・豊川市民病院 26 km
  - ・蒲郡市民病院 30 km
- ※渥美半島先端部から渥美病院までの距離 28 km

○渥美病院の立地は津波浸水想定、液状化発生想定から外れた区域であるが、病院北東部の海沿いの一部地域が想定区域に含まれる。（図2、図3）

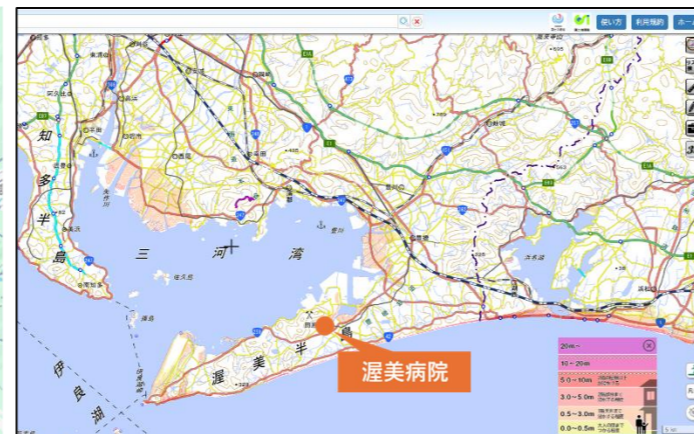


図2 津波浸水想定（想定最大規模） ※出典1

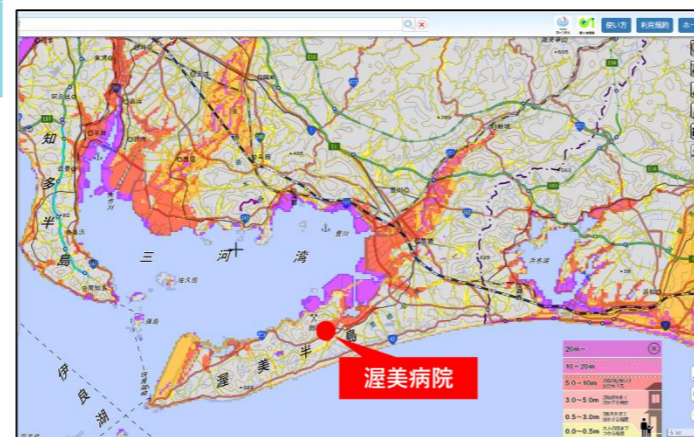


図3 地形区分に基づく液状化発生傾向図 ※出典1

出典1 国道交通省 重ねるハザードマップ

## 2. 渥美病院について

## (1) 病院概況

診療科目	内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、精神科、小児科、外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科	建築概要	敷地面積 57,023.00㎡ 建築面積 7,188.55㎡ 延べ床面積 26,292.87㎡ 構造規模 鉄筋コンクリート造（免震構造）地上6階・地下1階
病床数	302床 内訳：急性期203床 ：地域包括ケア病床55床 ：療養病床44床	関連事業	健康管理センター、訪問看護ステーション、訪問リハビリ、あつみの郷（老健、通所リハ他）
承認・指定	救急告示病院、病院群輪番制病院（二次）、基幹型臨床研修指定病院	職員数（医師数）	令和7年10月時点：533名（37名）
救急搬送件数	2,278件（令和6年度実績）	手術件数	1,453件（令和6年度実績）

## (2) 救急・災害医療について

## ①体制

当院は、病院群輪番制病院ではあるが、田原市内の医療機関の状況と市外の救急医療機関へのアクセス等を含め、現在、365日24時間体制で救急受け入れを実施している。

常勤医の約半数が田原市内または病院隣接の職員寮に入居しており、看護師についても、職員寮入居者が多数いるため、災害発生時においても、早期に多数の医師・看護師の参集が見込める状況である。DMAT候補者については院内で選定済みであり、今後、養成研修の受講を予定している。

## ②設備

病院敷地内に、航空法上の正式な指定ではないものの、ヘリコプターの離発着可能なスペースを有している。愛知県のドクターヘリ等の離発着実績もあるため、ヘリコプターによる救急搬送にも対応可能である。

災害時には、通常の救急処置室以外にも、院内の各スペースを活用して、トリアージエリアを設定し、多数の傷病者への対応が可能である。

また、院内に自家発電装置および受水槽と地下水利用設備を有しており、職員・入院患者を含めた人数分の食料も備蓄しているため、最低3日間は自力での診療継続が可能である。



## (3) 法人としてのスケールメリット

県内の8つの厚生連病院のうち6病院が災害拠点病院に指定されており、うち4病院が中核災害拠点病院となっている。また、統括DMATの医師も6名在籍しており、法人内での教育体制やバックアップ体制により、災害対応力の強化を図る。